

しら いし 白石(沖の白石)



別名「沖の白石」ともいわれ、4つの大きな岩からなる、びわ湖で一番小さな島です。一番高い岩は、水面からの高さが14メートルほどあります。このあたりのびわ湖の深さは、深いところで約80メートルあり、実際には約100メートル近い大岩の頂上部分が湖の上に出ていることになるのです。

この白石という名前は、岩の表面が白く見えることからつけられました。白く見える理由として、岩が風化して白くなったという説や、水鳥たちのフンによって白く見えるようになったという説があります。しかし、実際には白いのは岩の表面だけで、内部は黒っぽい岩でできています。



「シライシカワニナ」
水深1.5mより深い岩場に見られます。もともとは沖の白石周辺にだけ分布していましたが、最近では琵琶湖淀川水系のほぼ全域で確認されています。多景島付近で見られる同種は「タケシマカワニナ」とされ、見分けはつきません。「シライシカワニナ」も「タケシマカワニナ」も琵琶湖の固有種とされています。

☆琵琶湖の固有種について

固有種は、琵琶湖が長い年月他の水域から離れ、安定した環境が長く続いたことから形成されたと考えられます。魚類や底生動物等を含め、現在50種以上の固有種が琵琶湖で確認されています。日本の他の湖沼ではほとんど見られない固有種が琵琶湖に多く生育・生息するのは、琵琶湖が大きく、多様な生物が生育・生息できる環境を今なお維持していることと、長い歴史を持つ古代湖であることが関係していると言えそうです。

参考資料

- ・琵琶湖博物館ホームページ「<http://www.lbm.go.jp/>」